

# クワイン教授とのワークショップに参加して

飯田 隆

1997年

1996年11月12日に、国立京都国際会館において、財団法人稲盛財団の主催、本学会ならびに科学基礎論学会の協賛で、クワイン教授を迎えてのワークショップ「言語・ホーリズム・自然主義」が催されました。そのワークショップに参加したひとりとして、そのときの模様や感想などについて述べたいと思います。

このワークショップは、クワイン教授が第12回京都賞を受賞されたことを記念して開催されたもので、ワークショップの前日には、クワイン教授の記念講演がありました。私はちょうどこの記念講演の始まる直前に会場の京都国際会館に着きましたが、まず聴衆の数の多さにいささかびっくりしました。他の二人の京都賞受賞者(先端科学技術部門のクヌース教授、ならびに、基礎科学部門のカベツキ教授)の講演の後で、このあと引き上げて行くひとものかなと思って見ていましたが、そうしたひとはほとんどいないようでした。あまりにもひとが多いので、会場で知り合いを見つけるのにちょっと苦労したほどです。

「思想の明晰な簡素化」と題されたクワイン教授の講演は、だいたい一時間程度の長さだったと記憶していますが、たいへん印象深かったのは、クワイン教授が、自身の業績のなかで、論理学における仕事に最大の意義を認めているようにみえたことでした。また、表現の「使用 use」と「言及 mention」というきわめて基礎的な区別にわざわざ触れていたことは、意外でした。でも、考えてみれば、クワイン教授ほど、この一見トリビアルと思える区別を怠ったために生じた多くの擬似問題の擬似性を強調した哲学者はいなかったわけですし、この区別が、論理学の哲学のみならず、クワインの哲学の基本的なモチーフのひとつであることを再認識できた気がしました。翌日、午後からのワークショップの前に、ワークショップの参加者とクワイン教授との昼食会があり、クワイン教授と親しく言葉を交わす機会がありました。1908年生まれですから、88才という高齢のはずですが、この折りのクワイン教授はとてもお元気で、さまざまな質問にてきぱきと答えておられました。なかでも耳に残っているのは、「経験主義のふたつのドグマ」の「極端な」全体論はずっと前から取っていないということ、それにもかかわらず、この極端な全体論がしばしば取り上げられるのは、そこに何かロマンチックな — こうし

た表現ではなかったかもしれませんが — においをひとがかぎつけるからではないかという言葉でした。

さて、ワークショップそのものですが、ここでも聴衆の多いことにおどろきました。残念ながら、本学会の大会でのワークショップの数倍の聴衆でした。しかし、負け惜しみを言うわけではありませんが、ワークショップはむしろ人数が多くない方がよいという感じは、このワークショップのあいだ中ついてまわりました。結局のところ、クワイン教授の仕事のさまざまなテーマをめぐる四人の発表と、その場でのクワイン教授からの簡単なコメントがあっただけで、時間の問題もあったのですが、聴衆からの質問もごくわずかなものにとどまりました。クワイン教授の基調講演の前に、吉田夏彦氏(立正大学)からの挨拶と、大出晃氏(創価大学)によるクワイン教授の紹介がありました。吉田氏は、クワイン教授が先に日本を訪れて連続講演をなさったときのことについて話され、わが国の科学哲学界においてもクワイン教授の果たした役割が大きかったことを改めて思い出す機会を与えてくれました。ワークショップでのクワイン教授の基調講演は、「本能・物化・外延性」と題されており、きわめて広範な主題にわたって簡潔に触れて行くというスタイルのものでした。ごく短い時間のなかで、クワイン教授の哲学の基本的モチーフが次々と現れてくるのには、疲れましたが、私にはなかなか感銘深いものでした。その後、いずれも本学会の会員でもある四人の発表がありました。その各々について簡単に内容を紹介したいと思います。(せっかくこのようなワークショップをやるのなら、小冊子で済むのですから、その記録ぐらい残しておいたらよいと思うのですが、残念ながら、主催者側にはそのような考えはなかったようです。いずれ、この日の発表は何らかの形で活字になることを希望します。)

話した順番では、私が最初で、「数と個体化」というタイトルをつけましたが、これは実際には、クワイン教授がその論文「存在論的相対性」のなかで、指示の不可測性 (inscrutability of reference) が現実の翻訳に際しても生じる例として取り上げている、日本語の助数詞 — 「一本」、「二匹」、「三頭」などに現れる表現 — の例を再検討したものです。(最近のクワイン教授の著作では、「指示の不可測性」ではなく「指示の不確定性 (indeterminacy of reference)」と言われていています。この用語の変化がなぜなのかをたずねるつもりだったのですが、残念ながら聞きそびれてしまいました。) 日本語にも、個体化を行う名詞とそうではない名詞とを区別するいくつかの文法的特徴があり、したがって、日本語の助数詞の例は指示の不確定性の実例を提供しないというのが、私の論点でした。

次に話された丹治信春氏(東京都立大学)の「観察文の理論負荷性」では、クワイン教授のホーリズムが、観察文を特別扱いしている点で不徹底である点が指摘され、観察文にまでホーリズムを適用したとしても、われわれの信念体系において観察文が果たすべき重要な役割が損なわれることはない論

じました。これは、丹治氏の近著『言語と認識のダイナミズム』の延長線上での議論で、なかなか興味深い論点を多々含んでいると感じました。浜野研三氏(名古屋工業大学)の「自然主義と規範」は、クワイン哲学について注目すべき研究を積み重ねられている氏らしく、クワイン教授の論点への深い理解に裏付けられた議論でした。クワイン教授の「自然化された認識論」の構想が取り上げられ、それが認識論のもつべき規範性に欠けるという批判とそれに対するクワイン教授の応答とが詳細に検討されました。そのうえで、浜野氏は、規範性の要素を取り込みうる自然化された認識論の別バージョンを提出されました。

最後に話された富田恭彦氏(京都大学)は、過去におけるクワイン教授との対話をここでも続行するという形で、クワイン教授の哲学を近世以来の哲学の歴史という広いバックグラウンドのなかで位置づけるという興味深い試みを披露してくれました。クワイン教授の自然主義が、近代西洋哲学の伝統から乖離するものではなく、たとえばロックに代表されるような近代の哲学の基礎にある自然主義的傾向に合致するというテーゼは、なかなか刺激的であったと思います。

この四人の発表がそれぞれ終わるごとに、コメントを求められたクワイン教授からの簡単な応答がありましたが、いくらか奇妙な感じが残りました。これがなぜであったかは後になってわかったのですが、それについては後述します。いずれにせよ、私のものほともかく他の三人の発表はどれも密度の濃いもので、私たちでさえ疲れたのですから、クワイン教授の疲労ぶりはたいへんなものだったろうと推測します。ワークショップが終わってホテルに戻られるクワイン教授はすっかり疲れたご様子でした。さて、この日のワークショップそのもののクワイン教授の応答がいささか生彩を欠いているかのようにみえたのがなぜなのかは、しばらくたってからわかりました。ワークショップが終わってほぼ一週間ほど経ってから、私の勤務先の大学の郵便受けにクワイン教授からの手紙が届いていました。それによると、ワークショップの際に、私の発表を同時通訳を通して聞いたのだが、そのときにはほとんど理解できなかった、その後になってから、その日にもらった原稿を読んでみてはじめていろいろなことがわかった、日本語の例が使えないというのはその通りだと思う、云々、といった内容で、この手紙は近いうちにまとめる予定の自分の最近の論文集にも入れるつもりだから、その前に私が自分の話を論文として発表するのならば、その際にこの手紙からいくらかでも引用してよいと付け加えてありました。この手紙には感激しましたが、同時に、なるほどとも思いました。

同時通訳が用意され、聴衆はほとんど日本人なのだから、英語の原文を作ってそれを同時通訳に渡し、自分は日本語の原稿を読もうと私は考え、他の発表者のうちのふたりもそのように考えたようでした。いちおう周到な準備はしたつもりだったのですが、思ったほどはうまくいかなかったようです。や

はり、言葉が異なる場合には、コミュニケーションはきわめてむずかしいものだと改めて思いました。

しかしながら、全体としてはたいへん有意義なワークショップであったと感じます。このワークショップを組織され、当日の全体司会をも勤められた小林道夫氏(大阪市立大学) および野家啓一氏(東北大学)の労をねぎらいたいと思います。ことに小林道夫氏は、あいにくと体調の悪いなか、しかも、その後すぐにフランスに出かけるという忙しいなかで、いかにも大変そうでした。ご苦労さまでした。